

〈隨筆と考証〉

一葉と同時代の作家たち

—紅葉、鏡花、乙羽、柳浪、薄氷など—

千葉 正昭

1、一葉の經濟事情

一葉こと樋口夏子は明治五年五月二日、東京の千代田区内幸町一丁目で生まれた。父親は則義、母たきの次女としてであった。内幸町はいまビジネス街に化しているが、当時は東京府官員の宿舎（長屋）であった。父則義は、当時警視庁属官のかたわら金貸し、家屋周旋等の副業で樋口家はまずまずの水準を保っていた。

のち一葉は学校に通うようになって、切に上級学校への進学を希望した。私立の小学高等科四級を首席で卒業したところと、士族の娘という誇りがあつたためと言われている。

が如何せん母親が、娘には学問は不要だと口を酸っぱく語つた。

一葉の家は士族とは言え、それは父親則義が買収したものであった。元々父則義は山梨県山梨郡中萩原（現在塩山市）の農民であった。これは笛吹川上流の村で、則義は同じ村のたきを好きになりふたりで江戸へ駆け落ちをしたのであつた。のちこの夫婦は、渾身の共働きで貯金をした。その甲斐あつて、八丁堀同心の株を買つたのである。慶応三年のことであつた。翌年は明治元年である。

即ちこの身分は翌年明治になって無くなるが、士族という矜持として残った。則義にとっては、安心が消えたことになる。

が新しい時代に適合した副業としての金融業者（高利貸）として、則義は生き延びる。これを甲州人の気質として、計算高いところを指摘する人もいる。

一葉の上級学校への進学希望を、父親則義は知人を頼って歌塾萩の舎に入れることで決着を付ける。この歌塾は、中島歌子が経営する当時としては富裕層の子女があつまるところであった。

和歌を学び、文章を身に付けるといことが、当時の女性のたしなみとして評価されていたのであった。

一葉が萩の舎に入門したのは明治一九年八月、萩の舎のお嬢さんらにまじれば多少のみすぼらしさがあっても勉強の水準では引けをとらないだろうくらいの気持ちで親にはあったかもしれない。

しかし現実の一葉は、自分の着物を周囲の塾生と比して引け目を感じていたようだ。かなりの貧富の差を、覚えたのだろう。



父・則義

間もなく明治二〇年六月内閣制度実施による官員整理で則義は失職、新しい運送業に対する投資が挫折し明治二二年に病没する。

この直前一葉は、萩の舎で目を見張る体験をする。同じ学友の田辺龍子（花圃）が『藪の鶯』という小説を書き、明治二一年六月金港堂から出版して三三円二〇銭の稿料を得たという刺激的知らせを受けた。

花圃は、坪内逍遙の『当世書生気質』を読み、なんとか自分にもできると当世女版気質を西洋流にもじって風俗小説スタイルに書いてみた。花圃は、果断に富んだ女性であった。

花圃の父親は、田辺太一（蓮舟）といい幕末の漢学者であった。が職業上は幕府に仕え外国奉行支配調役、公使館書記官などを勤め、維新後は外務少丞として外交史の局面で活躍し、明治二三年に非職となる。在職中から豪遊を尽くす傾向があり、結局家産を傾けてしまい、花圃が手にした小説の原稿料は、すべて死亡した兄の法要の為に費やしたとも言われている。退職後の明治二五年頃には、中国文学の講義などを担当した。島崎藤村も、ここで「紅楼夢」を受講している。

花圃の『藪の鶯』の成功は、一葉をして、もしかして自分も小説を書けば生活が出来るかもしれないという希望を与えた。

一葉は、父親則義死亡の後、崩れゆく家計と対峙することになる。明治二三年九月から本郷菊坂に住み、妹邦子、母たきと洗濯と針仕事でかろうじて日々を過ごしていた。

萩の舎の知人の紹介で、東京朝日新聞の作家半井桃水に一葉が弟子入りしたのが明治二四年七月。一葉は、第一印象では桃水に好感をもった。桃水は、自分は文学的テーマをぐいぐい追求する小説を書きたいが、なかなかそれでは読者がついてこないため、止むを得ず大衆小説のようなかたちをとっていると語った。

桃水と一葉の関係は、師弟間としては良好な状態にあった。がやはり明治の時代であったのであろう噂が渦を呼び、萩の舎の師匠中島歌子からの苦言と友人たちからも芳しからぬ言葉を受け、一葉は止む無く明治二五年六月、表面上桃



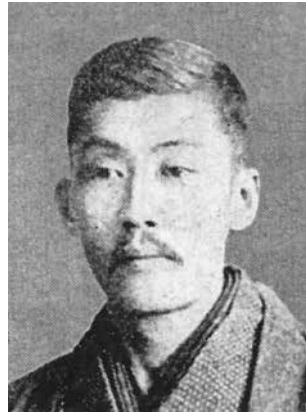
一葉



田邊 (三宅) 花圃



なからい
半井桃水



尾崎紅葉

水と訣別する。

のち一葉は、たびたび
桃水のことをあるいは彼
を指標にして自分の身の
周りの人たちを屈折的に
記したりする。

再び一葉の経済事情に

戻る。

明治二五年から一年ちよつとで一葉は七編の小説を書いて、三〇円の原稿料を手にした。これで一家三人が生活を営むことはできなかつた。

明治二六年六月一家で話し合い、商売を営むことにする。
だがやはり子供相手の駄菓子屋では生計は立たず、明治二七年五月、馴染んだ本郷の崖下丸山福山町にもどる。

2、一葉の交流図

左の交流図は、人物を網羅したものではない。一葉と、後の彼女の作品形成上関係があっただろうと想定できる人物達を、象徴的に紹介したものである。

明治二五年一一・一二月「都の花」に掲載された一葉の『うもれ木』は、平田禿木をして驚かしめた。禿木によって当時創刊準備中であつた「文学界」の客分として扱われた。これの仲介者は、田辺花園であつた。

物語のあらずじを紹介する。薩摩焼陶器の絵師入江籟三は、妹お蝶との二人暮らし。そこへかつて師匠を裏切った弟分の新次改め篠原辰雄が、やってきて和解する。がのち籟三は、辰雄たちが詐欺計画のため自分たち兄妹を利用しようとすることに気が付く。一方お蝶は、悩んだ末死を覚悟して家出をする。残された籟三は、すべて己の芸術への囚われが引きこんだことが原因だとして悩み、花瓶を庭石に叩きつけ、虚しい笑いを響かせるというものであった。

陶器作りで、その芸術性に固執する主人公の姿に、平田禿木は感心したのであるか。現代の読者が読むと少々物語世界に茫洋とした霧のような膜に覆われた感がするのだが、明治二五年頃の読者には衝撃を与えた。

のち平田禿木と仲が好かった馬場孤蝶も、たびたび一葉のもとを訪れるようになる。馬場孤蝶に対して一葉は、いたって好い印象を持っていたようだ。

『うもれ木』発表の前、即ち先ほど記した表面上半井桃水と訣別する前に桃水自身は、一葉を尾崎紅葉に紹介しようかということ述べている。それに対して古風な一葉は、即答を避けている。

そこには周囲の声に屈して桃水から離れることを宣言してすぐさま尾崎紅葉に鞍替えするということを、憚る一葉の心境があったのかもしれない。

ただここで半井桃水と尾崎紅葉が、比較的近い距離にあったこと、あるいは一葉自身にとっても紅葉が遠い存在ではなかったことは確認しておいてよい。

そしてここに、興味深い研究者の指摘がある。硯友社文学に詳しい新潟大学名誉教授伊狩章氏の報告、『にぎりえ』の構想と「心の闇」（『幸田露伴と樋口一葉』昭和五八年一月、教育出版センター）である。

結論から言えば、一葉は「にぎりえ」の主人公の感情面を、紅葉「心の闇」の人物からの影響を受けたという。

『心の闇』は、明治二六年六月一日〜同年七月一日に「読売新聞」に掲載され、明治二七年五月春陽堂から単行本として刊行されている。

物語は、以下のようなものである。盲目の按摩佐の市が、宇都宮第一の旅館千束屋に入入りし皆に可愛がられていたりわけ美しいひとり娘のお久米が、同情を寄せ毎晩お菓子などを持たせてやっている。

やがて千束屋ではお久米を嫁にやることにして、県会議員の息子築居喜一郎との縁談がととのう。それを知った佐の市は、激しい落胆に襲われる。

やがてお久米は、佐の市の執念が恐ろしいものとして感じられはじめ神経までも蝕まれるような状態になる。

この盲目の按摩佐の市の執念が、女に祟り人生の断面を指し示すようなかたちを、紅葉は江戸の昔から日本人の精神性として持っていたことを情緒豊かに描き得た。明治二〇年代は、古い価値観が根付いていたと言える。

伊狩章氏は、紅葉が執筆するに当たり河竹黙阿弥の歌舞伎脚本「葛紅葉宇谷峠」（安政三年初演）の中の「文弥殺し」の部分をもとにしたことをつきとめた。

いま我々は、『名作歌舞伎全集』第一〇巻（昭和四三年一〇月、東京創元社）によってこの作品を確認することが出来る。この作品のあらすじは、盲目の按摩文弥が検校の位を買うため江戸から京都にのぼろうとすると、欲にくだらんだ人間に殺され金を奪われる、というものであった。のち文弥は、自分を死に至らしめた犯人の家族にまで怨霊の限りを尽くすというかたちを続ける。

紅葉が、この黙阿弥の狂言を自分の物語に取り込んだことはほぼ間違いない。地理的表象として、黙阿弥作が宇都谷峠で紅葉作が宇都宮になっており、ふたつの物語とも展開上鬼気迫るものが感じられる。加えて主人公が、盲目の按摩であることは共通する。そして怨みが屈折していることも、原作の狂言と紅葉の物語と共通するものが感じられるのだ。

この『心の闇』が出てくる前までは、紅葉の作品に対して風俗や人物外面の細やかな描写のみが先行して人間の心理の細叙が少ないという批判が出ていた。それに対して明確な回答として、紅葉が出したのがこの作品でもあった。人間

心理の細やかな装を、紅葉なりに怨みと暗さと無気味なまでの屈折模様で描いてみせた。ある種の「哀感」(伊狩章氏)をも、ただよわすことに成功した。これは紅葉の出発期以来の基調音でもあった。

交流図に紹介した川上眉山が、一葉のもとを訪れたのは明治二八年五月二六日であった。



川上眉山



馬場孤蝶



平田禿木

一葉の日記には、「馬場君、平田ぬしつれ立て、川上眉山君を伴い来る」とある。

眉山は、一葉に紅葉の『心の闇』『男ごころ』などを置いて行った。一葉は、これを借覧し、『にぎりえ』の構想を立てたと伊狩章名誉教授は推測する。確かに伊狩章氏の推測は、説得力をもっている。

まず目の前に置かれた紅葉の作品に対して、如何様な印象を持ったのだろうか。

『心の闇』における恋の妄執の恐ろしさというテーマが、一葉に何らかの印象を与えたことは想像されるかもしれない。それが『にぎりえ』に移って、晝屋の源七がお力に対してかなわぬ恋ならば最後の手段の無理心中という手立てに走らせたという順序立ては、ある程度の説得力を持つ。

恋がかなわないならば、相手を殺して自分も自殺していくという構図は極論のかたちである。源七は、お力にたびた

び袖にされている。仕事がうまくいかなくなつて零落しても源七は、お力の幻影から離れられなかった。その極限の果てに、無理心中を果たすのであった。

一方お力は、自身の貧しい過去を振り返りながらも、啖呵を切つて女性として活力のある生き方は可能かと屈折的に語つてもいる。

とりわけお力は、自己の幼少期の貧しい家庭の事情を、銘酒屋にたびたび顔を出していた社会的成功者の結城に語る場面がある。米を親に頼まれて買っていく小さなお力が、その途中で水たまりに落としてしまふくだりがある。そこで幼い子どもながらの場面は、実に貧困の家庭環境に根差しているように描写されるのだ。

作品そのものだけを読むと、幼いお力が米を買いに行くという表現がみられる。だがそれから約五〇年以上経過した昭和二八年の文学座の俳優たちが登場する今井正監督の映画『にぎりえ』（淡島千景・出演）になると、お力は残飯屋からご飯をざるに入れて帰ってくる場面になっている。貧しさが、強調されているのだ。映画のこの場面をみると屈折困窮したお力の家庭が描かれている格好になっている。

川上眉山をして「自伝をものせよ」と語つたことが、一葉の肺腑に残つたとすれば、銘酒屋でのお力の弁舌や強がり他人を断定するしぐさも、象徴的だと言わざるを得ない。

つまりお力の強がりの表現は、一葉の心根であることに違いないという推測が成立する。他方で貧しい境遇で育つた自分は、貧困であつたが故にいまの銘酒屋のような場所で働いているのだという自戒の側面があつた。

そして一葉は、没落していきながらも源七が、お力が忘れられず自分の恋心に執念を燃やすという筋書きにシフトさせていった。ここには、執拗な恋慕があつた。あるいは、よじれる感情があつた。

紅葉の『心の闇』を、片岡良一氏は「単なる心理描写の鋭さというより、そうした歪んだ世界の恐ろしさ捉えている点」（尾崎紅葉）『石波講座 日本文学』昭和七年八月）として積極的な良さを評価している。

源七の無理心中の選択を、物語の末尾に臙化的表現で終わらせているのは一葉のすごさでもあり、他方紅葉からの吸収という側面も、成立するかもしれない。

伊狩章氏の視点は、注目していい。

ここまでくれば明らかのように尾崎紅葉という作家は、物語の構想に心理の屈折模様を盛り込むなど、深刻小説に先駆けるような良さを抱えていたともいえる。

単に硯友社文学は、江戸軟文学の残照という捉え方だけではない文学的美質を抱えていた。少なくとも一葉の心の中には、見習うべき要素のある文学としてあった。

3、一葉と鏡花

鏡花と一葉という二人は、ほぼ同時期に文壇に出たといっても過言ではない。



泉鏡花



大橋乙羽

互に愛していながらも実らない恋が悲劇で終わるところに独自の抒情性をもって描いた。ふたりの詩趣や抒情の質の違いはあっても、登場人物の気概という面では共通しているものがあるかもしれない。

鏡花は、次の年譜から分かるように、出発期はしばらくの間思うように芽が出なかった。

明治二四年一〇月、尾崎紅葉に入門。

明治二六年八月、脚気を病み金沢に帰郷。

同年一〇月、再上京。

明治二七年一月、父親死亡で帰郷。

同年一〇月、決意をして再々度の上京。

明治二八年一月、博文館「日用百科全書」編纂のため、大橋乙羽宅へ急遽寄寓。

鏡花のこの時代を、仲間であった米沢出身の大橋乙羽はつぶさにみていた。乙羽もまた作家志望で、紅葉の硯友社に明治二二年夏に入っている。ただ鏡花と決定的に違っていたことが、乙羽にはあった。彼は、既に東陽堂という美術出版社の記者であったのだ。社会人として乙羽は、月給をもらって仕事をしていたのであった。乙羽は、相当忙しかったが精神的な安定感を持っていた。

この乙羽が、紅葉と露伴とが億劫がった博聞館の西鶴全集の校訂を、素早く且つ正確に仕上げる。そのため主の大橋佐平に評価され、彼は娘婿を迎え入れられる。明治二七年一二月のこと、である。

乙羽は、結婚式の翌月には「日用百科全書」を新企画として打出し、その担当者に泉鏡花を据えた。鏡花は、喜び勇んで乙羽の自宅に寄寓する。給金がもらえて、紅葉の玄関番から解放されるためでもあったからだ。

鏡花は、編集にも精を出し他方小説執筆にも活力を注いだ。この鏡花の意欲が、小説の結構にあらわれる。

即ち『夜行巡査』（明治二八年四月、「文芸倶楽部」）で、ある。この物語の主人公の職業は、明治維新になって現れ

た新しい職種であった。

主人公は、強弁する。他人の家の軒先で、雨宿りや夜を更かすということは許されない。たとえお金が無くても許すことは出来ない。

そんな堅い法律遵守の警察官が、溺れかかった人間を前にして職業人巡査として掘割に飛び込む。水に入ってから自分泳げないのだと思ひ直すが、時すでに遅く殉死してしまふ。

制度を頑なに守っていく人間の悲劇が、ここにはある。

明治という新しい時代の中から生まれた治安を守る職業が、法律を強固に守ろうとする人間を戯画化して描いたようなところがある。後年観念小説とも呼ばれたが、新しい時代の制度や息吹を感じさせる色合も備えていた。

鏡花は、もう一つ『外科室』（明治二八年六月、「文芸倶楽部」）をも発表する。これもまた新時代の科学というものと古い観念にこだわる人間の葛藤が悲劇を呼ぶかたちになっている。

植物園で一目ぼれをした、医学生と伯爵夫人とのドラマだ。麻酔薬クロロホルムを嗅ぐと讒言をいうとひたすら信じている伯爵夫人。彼女は、夫以外に意中の人がいた。麻酔を掛けられて、それを口にしては自分と家との恥だと考え麻酔を固辞する。結局麻酔無しで手術が始まるが、途中で伯爵夫人は執刀医のメスを奪って自害する。その執刀医もまたその夜に自殺するという話である。

明治という時代に、麻酔という新らしものを物語の素材に導入した鏡花は、いままでに無かった小説の構想の展開をはかった。そこに新たなロマンの悲劇創出を、試みたのであった。

次いで紹介すると『海上発電』（明治二九年一月、「太陽」）も、また海上発電報というものであった。新しい科学に裏打ちされた制度や薬品そして技術が、小説の素材になっていくという現象が現れる。

他方一葉は、鏡花のこれらの作品を目にしながら驚きを禁じ得なかったのではなかったか。

ただ古い価値観や生活様式に縛られて苦しんでいた一葉は、これら鏡花の新時代という観念を見据えながらも自分は自分なりの世界の捉え方に準じていこうという意識が芽生えていたかもしれない。

一葉は、自分は鏡花のような新時代の文物に焦点を当てて物語を紡ぎだすことは出来ないと認識していたに違いない。さすれば古い日本のしきたりに縛られながら、窮屈な思いを抱えて苦悩する人物を造形せざるを得なかった。

それ故一葉は、意識的に『十三夜』や、『にこりえ』を綴っていった。

4、深刻小説との出会い

前述したことであるが川上眉山と一葉との出会いは、明治二八年五月二六日であったが、一葉はその段階で眉山がすでに『大さかずき』（明治二八年一月、「文芸倶楽部」）や、『書記官』（同年二月、「太陽」）の書き手であったことは知悉していた。

『大さかずき』は、約束した女性に裏切られた男が大杯を喰らい自暴自棄の深酒で野たれ死にするという悲劇である。『書記官』は、某省の書記官奥村辰弥が政商三好善平の娘光代に目を付け、娘の父親善平に炭鉱払い下げの機密をもらし、彼にこれを手土産に光代を妻にするというものである。光代には綱雄という恋人があったが、彼は絶望してそれ以後の生活を哲学研究に明け暮れるという筋である。

官僚や政商たちの腐敗を暴くことが主眼で、虐げられる弱い人たちの悲哀はどちらかというに従のかたちになっている。

一葉は、「文芸倶楽部」や「太陽」で川上眉山の名前は知っていた。日記にも、そのような箇所が目につく。

この眉山もまた、どちらかといえばはじめは硯友社の紅葉に近かったところだった。ただ次第に紅葉の風俗絢爛描写だけ



柳浪 広津

では物足りなさを覚えて、次第に「文学界」同人たちの理想主義的な考え方に共感を覚えていたふしがかがえる。そして硯友社の中で客分的な位置にいた広津柳浪の存在が、一葉は多少気になっていたのではなかったか。柳浪は、『女子参政賢中楼』（明治二〇年六月一日〜同年八月一七日、「東京絵入新聞」）で、作家生活に入る。のち柳浪は、博文館に入り、雑誌「やまと錦」の編集に従事していく。ここに紅葉の推薦があつたか、詳らかではないが何らかの紅葉側からの気働きはあつたのではないか。

明治二二年一〇月には、『残菊』（「新著百種」第六号）で世評高く名声も上がった。

これは若い人妻の自叙伝的物語で、彼女が結核患者となり、その心理を深く描写したところに特色がうかがえる。この女主人公の悲劇的心模様描写に、のちの柳浪の人生暗黒面へと進む境地を示したともいわれている。

鷗外の『舞姫』が明治二三年であることを想起するとき、この柳浪の作品は、その一年前に発表されていて実に心理描写の先駆的存在を示してもいた。『舞姫』には心理描写は少なく、すべて主人公太田豊太郎や副主人公エリスの行

為やしぐさなどから、心理を推測させる小説となっている。このことを考える時、柳浪の『残菊』は、近代小説の中で心理描写という技法の先駆的役割を果たしたと断言できる。

くどいようだがこの悲劇的描写の衝撃力は、特筆していた。

明治二四、五年頃には、柳浪は「東京中新聞」「中央新聞」「都新聞」などで活躍する。

そして明治二八年、柳浪は文壇に大きな波紋を投げかける。

同年二、三月に、『変目伝』（「読売新聞」）を、

同年五月に、『黒蜥蜴』（「文芸倶楽部」）を、

同年一二月に、『亀さん』（「五調子」）を、発表する。

これらの小説題材は、障害者、醜女、精神障碍者に求められたところから、深刻小説、悲惨小説とよばれることになる。人生の暗黒面の曝露は、柳浪にとって『残菊』以来の一貫してきた主題に過ぎなかったが、時代の動向である貧富の差の問題や、社会から隔てられた人々の存在を大きく捉えたところが、彼をスターにした。

右の三作品から、『黒蜥蜴』を紹介してみる。

物語は、貧しい大工与太郎の妻お都賀が舅吉五郎の虐待に耐えかねて黒蜥蜴を食べ物の中に入れ、舅を殺し、乳飲み子を残して自殺するという怨念が主題になっている。

お都賀が黒痘痕の醜婦であるうえに、舅吉五郎は酒浸りで息子の嫁六人に手を出し、七人目のお都賀をすら犯そうとする。吉五郎は、憎い悪役になっているし、お都賀の怨念もまた『四谷怪談』のお岩に通じるものに仕立てられているともいえる。

お都賀が寂しく孤独な女でなかったなら、前の六人の嫁と同じように逃げ出していたろう。

また吉五郎のゆがんだ愛欲というものもまた、物語の破滅にむかっている。展望や、人生のやりなおしという構図は出てこない。ひたすら深刻で解決は、ない。

硯友社の仲間であった江見水蔭、小栗風葉、小杉天外、川上眉山などに感化を与えたことは間違いなかったか。

勿論硯友社に近い関係にあった樋口一葉も、柳浪の暗黒的世界観の影響圏内にいたといえる。

『にぎりえ』の主人公お力の幼い時の回想場面に、暗く貧しい家が出てくるのは、一葉自身の実人生の経済的困窮があつたことは事実だが、柳浪の世界観と無縁でもなかったとも言えるのではないか。

一葉の貧乏に対する眼差しは、なかなか激しく厳しいものであつたが、それは実際の彼女の家計だけでなく、その性癖にもあつた。

客観的観察者としての三宅（田辺）花圃の晩年の回想録「その頃の私達のグループ」（昭和六年一月、「婦人サロン」）には、次のような箇所がある。

なつちゃん是非常に好い素質をもつてゐたが、それと同量の欠点も持つてゐた。それは彼女の嫉妬深いこと、ひねくれてゐることであつた。彼女のひがみ根性が彼女のあらゆる欠点の根源をなしてゐた様にさへ思はれない事もない位彼女は素直でなかつた。

萩の舎でかなり一葉に近いところにいた友達として、的確な指摘かもしれない。

この指摘を松坂俊夫氏は、関良一氏の『樋口一葉―考証と試論』（昭和四五年一〇月、有精堂）の花圃と田辺（伊藤）夏子の思い出を比較して、より客観的なものは花圃の方ではなかつたかという結論を出している。

結果から言えば、一葉の「ひがみ根性」が登場人物の困りようを更に深刻に色濃いものにしたとも言える。

もう一度柳浪にもどる。柳浪は、深刻癖だけではなく、日本の社会に根深く生き付いていた人情味や、義理の觀念なども、取り上げる作家的技量を備えていた。

それを示すものとして永井荷風の母親が、柳浪の小説の読者でもあつたことを示すのは、はずれているだろうか。彼女の父親である鷺津毅堂は、漢学者でもあつたことを想うとき、作家柳浪の底力と魅力の大きさのようなものを感じなくもない。

のち柳浪は、明治三〇年代末まで活躍する。が明治四〇年代に入ってから厭世的傾向が顕著となり、創作意欲に衰えがみられるようになり、やがて筆を折るようになっていく。

5、北田薄氷^{きただうすらい}



北田薄氷

一葉の代表的作品『十三夜』（明治二八年二月、「文芸倶楽部」）に、小説構想上の影響を与えた作家・作品がある。北田薄氷の、『鬼千疋』（明治二十八年五月、「文芸倶楽部」）である。

これを指摘したのも、紹介してきた伊狩章氏である。結論から言えば一葉は、大橋乙羽が腕を奮って明治二八年一月以来展開してきた「文芸倶楽部」第五号に掲載された『鬼千疋』を、じっくり読んだであろうと推測する。

それは何故かと言えば、『鬼千疋』に登場する女性主人公のありようが、一葉の『十三夜』のお関に非常に似ているところがあるからだ。

『鬼千疋』の、あらずじを見てみよう。

維新前は相当の家柄だった士族の娘お秋が、美人の上、親孝行で従順な性質を見込まれて、富豪の松宮の家に嫁ぐことになる。

お秋の父は、いま零落して他人の「代筆に端金を貰」っている貧乏暮らしたが、娘のしつけは厳しく、昔気質で娘に、「女は三界に家なしといへり、さらば、嫁に行きたる家を我家と思ひて」姑や夫によく仕えよ、と教訓する。

お秋の夫松宮寛治は海軍大尉で、お秋を愛し、姑も上品で人柄もよく家庭内は円満だった。が或る日、寛治の妹の富子が帰ってきて波瀾が起きる。

富子は、駿河台の女学校を出た新時代の女であるが理想が高いため縁遠く、二五歳の今まで独身であった。春より肋

膜を患い田舎に転地していたが治って帰ってきたものである。

富子は、お秋に学問が無く実家が貧しいことを侮り、またお秋が美人なることを嫉妬し、小姑根性でお秋をいびる。

お秋は、誠意を尽くして仕えるが甲斐もなく、針のむしろに坐している如くとなる。寛治は、急に清国の沿海に航海することになる。留守中お秋は、懐妊に気が付き、実家に帰ろうとするが許されない。

それでもお秋が帰りつくと、家の父母は、実家に泣きついてきたその不心得を責めたてる。

お秋は、両親の意見を入れ、思い直して実家には二度と帰らぬ覚悟でもどつてゆく。

しかし、思いあまつたはて、十九歳の身空で井戸に身を投げる。

一葉の『十三夜』に親しんできた人たちは、気が付くであろう。主人公お関の人物像に重なる部分が、目に付くのではないか。

美人で、気立てがよく、学問はない嫁側に対して、婿側が、是非嫁に来て下さいと所望するかたちである。

そして嫁ぎ先での苦労を実家でこぼす場面も、同じである。

実父が諭す価値観もまた、共通している。嫁にいったお前が辛抱すればすべてはうまくいく、というものである。『十三夜』の父親よりも、『鬼千正』のお秋の父は厳しい訓戒を述べている。お秋の行き場は、ほとんど見つけられないかたちで終わるのである。

一葉は、この『鬼千正』を読んだであろうというのが伊狩章氏の解釈だ。理路は、整然としている。

薄氷は、かなり若い時分から紅葉の弟子として添削を受けていた。

次いで薄氷の伝記を、確認してみる。

薄氷は、本名を尊子といい、明治九年三月一四日、弁護士北田正董（まさただ）の二女として大阪に生まれた。明治一三年一家上京の後、東京府高等女学校（現白鷗高等学校）を経て、麹町の文芸学舎（現千代田女子学園）、芝区の英

学専門学舎などで、国、漢、英米文学を修めた。

薄水の父が春陽堂主人和田篤太郎と交際があつたのが機縁で、紅葉に師事するようになる。その際薄水の号を受け、『三人やもめ』（明治二五年三月作、「近江新報」のち同二七年六月以降「東京文学」に再掲載）を、初作とした。時に一七歳だったというから才気は、あつたのであろう。

主人公の銀行員は、母親の命令のまま愛妻を離縁して、恩義ある主家の娘と再婚する。しかし新しい夫婦は、しっかりと離縁する。主家との関係とか、世話になつた義理や恩というしがらみは、この時代特有の人と人とを結ぶ観念だったが、どことなく紅葉の『夏瘦』や『二人比丘尼色懺悔』を髣髴とさせるような感を残している。

この薄水は、前述した『鬼千疋』や『黒眼鏡』（明治二八年二月、「文芸倶楽部」）および『乳母』（明治二九年五月、「文芸倶楽部」）あたりから、その特色を出し始める。

明治二九年六月の田岡嶺雲の評価を読めば、この年の薄水の勢いもまた肯うことができるかもしれない。いま薄水の『乳母』は、『深刻・悲惨小説集』（平成二八年六月、講談社文芸文庫）で読むことが出来る。

のち薄水は、画家梶田半古と結婚して夫の職場であつた富山の高等工業専門学校へ同行していく。そのあたりから薄水は、自然と文壇から遠ざかる。

かつての師紅葉は、心配して弟子の田中夕風にたずねたりもする。このあたりの考証は、伊狩章氏の博覧ぶりに驚くが、確認してみると小林栄子「紅葉追憶」（『明治大正文学研究』第三号、昭和二五年五月、東京堂）に、次のように記されている。小林栄子という名称は、結婚後の田中夕風である。

ある時、先生が「北田は何か、あなたに咄しませんか。半古に何か不満でもあるのではないかと思ふ。まるで人間がちがつてしまつて子供が生まれてから、からだがわるいのに風通の三枚がさねと帯を京都へあつらへさせて、

出来て来たならそれを 着て歌舞伎座へゆくと 言つて着た事は着たけれども、それつきり動けなくなつてしまつて、
どうも変なんで」とのお咄。夫婦間の事などは一つも聞いた事がないので、どうしようかと思つて居た。明治卅三
年十一月五日うすらひさんは終に亡くなつて残した男の子もあとで亡くなつた。梶田さんは其後後妻を迎へた後、
自分も亡くなつてしまつた。

もう一つ薄氷を取り巻く、戯文調で少々読みにくい回想記がある。泉鏡花の『薄紅梅』（昭和一二年一月五日）同年
三月二五日、「東京日日新聞」・「大阪毎日新聞」である。

辻町糸七（鏡花）のわび住まいに、月村京子（薄氷）が訪ねて、糸七に何やらくどくどと繰り返し述べる場面がある。
糸七は、京子を友人の画家矢野弦光（矢沢弦月）に縁談を取り持つが、糸七をしたっていた京子は、その怨みから逆に
糸七が毛嫌ひする画家の野田青麟（梶田半古）と結婚する。

京子がかきくどく場面に、鏡花と薄氷との心底に相互の恋心があつたのかもしれない。
しかし残念ながら北田薄氷の作家活動は、東京から離れることであつて行く。

明治維新になり新しい社会が開かれたと言つても、意識が高い同士の結婚とか、あるいは嫁になつても自分の思うま
まの仕事をし続けて行くことの困難は、まだまだ解決されていなかつたのだ。

6、美妙と稲舟

田沢稲舟は、開明的な地方の名家に育つたが、少々身勝手でもあつたのかもしれない。ものすごく単純に言つてしま
えば、このような形容もまた外れてはいまい。



山田美妙

この女性は、のち山田美妙と結婚する。どうしても美妙を説明しなければ、稲舟の輪郭がぼやけてしまうと判断する。回り道になるが美妙から、説明していききたい。

少年時代紅葉と美妙は、近所の友達同士であった。

山田武太郎は、養祖母ますと母との三人暮らし。父は南部藩士であったが、のち島根県警へ単身赴任。

これは実父が、母と実子の面倒をみるのが億劫だったとの説がある。

山田美妙は、明治二〇年六月、予備門から文科大学（東京大学）への入学が不許可となった。美妙は、当然その将来発展すべき方向を、文壇方面だけに限定しなければならなかった。

ます婆さんの落胆は、本人のそれを上回ったと言われている。ます婆さんは、美妙に勉強させて将来自分は非常に楽な隠居生活を夢見ていたからだ。

一方紅葉は、予備門からそのまま法科大学（東京大学）へ入った。

美妙は、差し当たり生活費を稼がなければと考えた。この頃編集所を成美社とした「以良郎女」という雑誌を発行する機運があり、その時予備門生徒社として「以良郎女」という雑誌を、模索していく。



田沢稲舟

中川小十郎にすすめられ美妙は、そこに入って行く。そこで言文一致体の小説を、模索していく。他方紅葉一派の硯友社は、明治一八年に結成され回覧雑誌を出していた。

明治二一年五月、九段中坂共益社の向かい側の空き屋を借りて本部にする「我楽多文庫」を刊行。尾崎紅葉、巖谷漣、石橋思案、丸岡九華、川上眉山、月の舎が、順番を決めて詰めていた。

美妙は、成美社が忙しいため時々訪ねるくらいであった。

そのうち美妙が病気になり、小説が書けないことが「我楽多文庫」に載る。

苦しい状況のなか「以良都女」月報を、石橋思案が手伝った。そんななか「読売新聞」が、美妙に言文一致体の小説を注文してきた。これは当時の作家たちが、苦慮していた問題でもあり、明治維新にふさわしいスタイルの実験でもあった。

明治二〇年一月二〇、同二三、一二月六日、と三回に分けて『武蔵野』は、「読売新聞」付録として掲載される。この小説が発表されるや、反響や噂がすごかったと言われている。

新しい言文一致（時制の現在形多用）と、浄瑠璃の「おじやる」という表現とが、新味を醸して読者を驚かせた。

あ、今の東京、昔の武蔵野。今は錐も立てられぬ程の賑はしさ。昔は関も立てられぬほどの広さ。今仲の町で遊客に睨つけられる鳥も昔は海辺四五町の漁師町でわづかに活計を立て、居た。今柳橋で美人に拝まれる月も昔は「入るべき山もなし」極の素寒貧であつた。実に今は住む百万の蒼生草。実に今は生えて居た億万の生草。北は荒川から南は玉川まで、嘘も無い一面の青舞台で、草の楽屋に虫の下方、尾花の招引につれられて寄来る客は狐か、鹿か、又は兎か、野馬ばかり。

現在の東京からはじまり、すぐに戦国時代にさかのぼり、死骸を説明して読者の気持ちを引き付ける方策はうまいかもしれない。

新田勢と足利勢とが関東地方で争っている時代に、新田勢の落ち武者である父子が戦死するという上巻。中巻ではその妻子が現れ、下巻では娘が熊に食われてしまう。何というか残酷な話で、むごい感がする。

極論すれば後年の美妙の露悪趣味が、うかがえるような展開である。

明治二十一年八月、短編小説集『夏木立』（金港堂）が発行されると、美妙の名前はさらに噂される。

この明治二十一年は、雑誌創刊ブームの年でもあった。以下の雑誌が、刊行される。美妙は、金港堂から編集者として声を掛けられる。美妙にとってお金が入ることは、願っても無いことであった。

四月、言論雑誌「日本人」（政教社）、志賀重昂らが同人。

八月、文芸雑誌「日本文学」（水穂会）、落合直文らが執筆。

一〇月、文芸雑誌「都の花」（金港堂）、山田美妙編集。

十一月、文芸雑誌「大和錦」（博文館）、広津柳浪編集。

同月、文芸雑誌「小説萃錦」（春陽堂）、饗庭篁村編集。

同月、教育雑誌「少年園」（少年園）、山県悌三郎編集。

美妙は明治二十二年一月、『蝴蝶』（「国民の友」付録）を発表。主人公は、平家侍女であるが、渡辺省亭が描く挿絵は、全裸に近いかたちで当時は賛否両論で、美妙は保守派からかなり批判される。が美妙への原稿注文は、殺到した。このとき「国民の友」は増刷で、美妙に重ねて四〇円の祝儀金を出した。これで美妙は、人力車を購入したが、他の人たちから饗庭を買う。一方この勢いで美妙は、浅草の芸子石井留女へ接近する。

明治二三年の美妙の執筆原稿は、三九編であったというからすごい。この年「江戸むらさき」の〈当世文壇十傑〉には、投票で八〇点の第一位に山田美妙、幸田露伴、尾崎紅葉が名を連ねている。美妙の勢いが、うかがわれる。この投票結果は、およそあたっている。露伴や紅葉に、この年の美妙の作家的勢いは十二分に迫っていた。むしろ上回ってい

たと言うべきかもしれない。

明治二三年には、美妙は日本韻文論に力を入れるようになるが、これに内田魯庵と石橋忍月が論難する。文壇内で多
少人氣は落ちるが、まだまだ美妙の文壇的価値は健在だった。何故なら「国民新聞」が、彼を入社させたからだ。

この年一〇月に、田沢錦子こと稲舟が美妙を訪ねてくる。この時美妙は、面倒な女性と遭遇したと判断したかもし
れない。稲舟は、一方的に微妙に問い詰めるように質問を浴びせたようだ。

田沢稲舟は、明治七年一二月、山形県鶴岡の生まれで本名を錦と叫んだ。父は、外科医。明治二四年、上京して共立
女子職業学校図案科（現共立女子大学）に学んだ。

彼女は、文学への志をかため、習作を試みようとしていた。さらに美妙との交流の中から、刺激をうけていたことは
想像に難くない。

が親の心配が高じて、彼女は学校を退き鶴岡に帰ることになる。

さて美妙は、明治二五年八月に「国民新聞」を退社して、『日本大辞典』編集に傾注していく。

時はこの前後逍遙の家で、依田学海、長田秋濤、山田美妙らは演劇改革を話し合っていた。がその後美妙が、つい口
を滑らしたことを逍遙の弟子であった「歌舞伎新報」編集の岡野碩が記事にする。逍遙が、激怒する事件が起こる。

更にもす婆さんの告げ口で「万朝報」の黒岩涙香が、石井留女との情交を暴露する記事を掲載した。

これに輪を掛けて嘔みついたのが坪内逍遙だったから、美妙にとってはとりつく島が無かった。泣きつ面に蜂よりひ
どかった。明治二七年一二月のことである。

ただ現代からすれば、逍遙の言い分は理解し難いところもある。女人の女性をかこって何が悪いのかということでも
あるが。前のトラブルが、尾を引いていた。

硯友社とは既に断絶していたので紅葉も、美妙をかばうことはしなかった。

そして何より美妙には父親が不在だったため、怒って行動するという活力に不足していた。が前後して文壇人二人が、美妙を認める。これは大いなる救いであつたらう。

やがて、共立女子職業学校を中途退学して郷里鶴岡に帰っていた田沢稲舟が、文学への思いが止み難く美妙に指導を仰ぐように手紙をたびたびよこすようになる。美妙も気をよくして、彼女の作品について指導と助言を加えた。

そしてついに二人の関係は、美妙をしてもう一度上京しないかという科白を吐かせる。

稲舟は、親とのいざこざもあつたらうが上京する。はじめ浄瑠璃の下書きなどをしてきたが、小説を書きたい思いが募り筆を執り始める。その前後して稲舟は、一葉の存在を目にするようになったといわれる。実際は稲舟がまだ鶴岡にいた当時から、一葉の小説の凄さに気が付いて対抗意識を抱いていた様でもあつた。

気の強い稲舟は、闘志をもちし執筆を続けるが、実際は美妙が相当程度手を加え構想修正まで口を出した。『医学修行』（明治二七年七月、「文芸倶楽部」）には、それが顕われている。

この「文芸倶楽部」掲載については、同じ山形県出身の大橋乙羽の働きによつた。作品発表の後稲舟は、小石川の学生下宿に入居し、小説『しろばら』を執筆し始める。

やがて明治二八年一二月の「文芸倶楽部」に、この小説は掲載される。この号は、閨秀作家特集でかなりの女性が名を連ねている。花圃、一葉、薄氷、楠緒子、小金井喜美子などである。

『しろばら』は、篤磨という華族の息子が愛人の芸者を棄て、貴族院議員の娘光子に惚れて様々な手を使うのだが光子は受け入れない。それにも関わらず篤磨は、勝気な光子を直江津の旅館に誘い、忍び込んでハンカチに染み込ませたククロホルムを嗅がせ犯してしまう。その翌日光子の全裸の死体が柏崎の荒磯に打ち上げられ、という場面で終わる。

残酷な恋愛小説である。がこの小説掲載のため「文芸倶楽部」は、爆発的に売れたという。若い女性が、悲惨な最期を遂げる物語として注目を集めたのであつた。

ただ客観的にみればやはり一葉の『十三夜』の、お閨が家のため内向する重層的屈折心理の余韻などでは、稲舟の作品はかなわなかったのではなかったか。

稲舟が小説の素材に使ったクロロホルムが、眉目を引いた。鷗外が非難をしたが、外科医を父親に持った稲舟にとって、この薬品は彼女の身近にあったものでもあった。

この後美妙と稲舟は、結婚する。鶴岡の父母は、止む無く事後承諾を与えるかたちだったろう。かつて美妙は、スキヤンダルに泣かされた。美妙は、それを想って電撃的に結婚した。

この二人の成婚を、明治二十九年一月一日の「読売新聞」が記事にする。

この新聞記事を見て一葉は、原稿用紙の切れ端に、「いな舟かの主義まれ候とても…」と記した。

一葉は、奔放な稲舟の行動のあり方に対して羨ましく思っていたというのが実情だろう。半井桃水との関係で、自分の恋心をやるせなく思っただろう。桃水との関係を、噂に押し負けて破談にしたことの複雑な気持ち達が湧いてきたのではなかったか。



稲舟遺墨

しかし現実には厳しかった。稲舟を待っていた美妙の家庭は、養父母ますの居丈高なまなざしと冷たいあしらい。一方の稲舟もまた、無教養な義母とは口を利かず、気が合わないという格好で稲舟の心痛が増す。ここに、多少の稲舟の見勝手さはあったのだろうと推測がつくが。明治三〇年前後の家制度は、現代では想像できないくらいに強いものであったろう。

肺結核に冒された稲舟を、母親は強引に鶴岡に連れ戻す。夫が医師であったこと、娘が姑にいじめられたことを想う時一刻も待って

いられなかったのだろう。

この後の稲舟の精進ぶりは、病気の行く末が案じられたもので鬼気迫る絵画等を残す。

稲舟は肺結核で、薄氷も富山へ行くと執筆から遠ざかりやがて病没していく。一葉は、優れた評価を重ねるが残念ながら経済の壁と肺病で短い生涯の燈火を小さくしていく。当時の女性作家の前に、近代の社会は、まだまだ厳しく立ちはだかったのであった。

〈付記〉 本稿は、台東区立一葉記念館で行われた講話「一葉と同時代の作家たち」（令和元年六

月一日）に、加筆・訂正を加えたものである。収中写真の一部は、近藤直子氏「雪月花のみやび樋口一葉」（「花美術館」第六六号、二〇一九年六月、株式会社花美術館）からのものである。謝して記す次第である。

（元山形県立米沢女子短期大学教授）